

## 現場からの報告

### 通信制教育の現場から

石垣 智博

この四月、人事異動により、単位制による通信制課程の高校に転動した。前任校（進学校）とは全く環境が変わり、日々驚きの連続である。通信制とはどんな現場なのか、少しばかり紹介もしたい。

通信制にはふだん生徒がいない。生徒は毎日通って勉強するかわりに家で「レポート」により学習する。それを学校へ郵送し、我々教師は添削、評価して返送する。（不合格なら再提出、合格なら次のレポートへ進む。）このレポートが通信制教育の大きな柱であるが、もう一つの柱が「スクーリング」（面接指導）である。つまりは「授業」なのだが、これが日曜日と水曜日に設置されている。ただしこれは毎回出席する必要はなく、各科目の出席義務時間数を確保すればよい。これに規定の回数のテストを加えて単位認定となる。例えば、必修修科目「国語Ⅰa」の場合、レポート10回、スクーリング必要数3回、テスト合格3回をクリアすると3単位修得となる。（合計80単位以上となった時点で卒業である。）

生徒は、中学を卒業したばかりの者から、会社員、主婦、高校中退者……年令でいえば15才から60代までと幅広い。彼らは前衛のとおりいつも出席するわけではないので授業の顔ぶれは毎回変わる。……お解りだろうか。通信制の授業では、継続的な展開ができず、どの単元も一回完結なのである。（例えば「富嶽百景」も一時間一本勝負。）全体の流れを確認した後は、レポートをやる上で理解に苦しみそうな一箇所か二箇所に触れるのみである。あとはレポートのやりとりの中で、書いて説明していくしかないのだ。

初めてスクーリング授業をやる前、同僚に「指名して質問しない方がいい。」といわれた。人間関係を構築し、相手を見極めた後ならともかく、普通校のように無雑作に指名すると、精神的負担になって、スクーリングに来られなくなる生徒が多いというのだ。実際、私にも生徒の親から指名だけはほしと電話があった。自分のクラスを調べても、十代の生徒には、中学時代不登校だった者が半数近くいる。（本校の場合、そういう生徒の割合は、ここ数年で急増しているそうだ。）このような事情から、五月末の現在、まだ私は授業で指名していない。いわゆる講義形式の授業である。しかし、一方通行の授業は、自分の精神衛生上よくないので、全体に向かって発問し、或いはたわいない話もし、何とか反応を引き出そうとする。すると雰囲気微妙に変化するのを感じられ、とりあえずほっとする。（中年の女性は大きく相槌を打ってくれ、とてもありがたい存在だ。）

この場合で、自分は国語教師として、どういう方向を目指した

らよいか、暗中摸索の状態である。いまだに右往左往しながら、通信制での二ヶ月が過ぎようとしている。

(静岡県立静岡中央高校)

## 『平家物語』父子話余談

利根川 清

源平合戦、一谷生田森の戦場の一面面である。

梶原、郎等共に、「源太は如何に」と問ひければ、「余りに深入りして討れさせ給ひて候やらん。遙に見えさせ給ひ候はず」と申しければ、梶原源をはらはらと流て、「軍の先を懸うと思ふも子共がため、源太討せて景時命生ても何にかはせんなれば、返せや」とて又取て返す。

『平家物語』巻九「二度懸」の一節である。この後、父景時は身を惜しまず敵陣に駆け入り、大童になって苦戦する窮地の我が子を無事救い出す。『平家物語』の中でもとりわけ爽快感のある章段である。

戦闘という極限状況下にあつても、父の子を思う情は深い。この場面の軸となっているのはそうした実に人間的な温かなものである。

必死に敵陣を駆け抜け、ふと振り返ると一緒の我が子の姿が見えぬ。その折の父の不安は大きい。それに即座に答える郎

等の返事はその不安を的中させる。父は絶望し、大いに歎く。だが、父はあきらめない。疲労に鞭打って、類例のない二度懸をやつてのける。「先ず我身の上をば知らずして」とあるように我が身を忘れて敵中を駆け回り駆け回り我が子の姿を探し求めるのである。ここでクローズアップされるのは坂東の名だたる武將ではなく子を切実に求める「父」梶原景時の姿である。

『平家物語』の魅力は無常感と言つた高踏的な世界ばかりではない。むしろ、こうした人情の機微を対話文を巧妙に織り混ぜることで、リアルに且つ動的に描ききつていふことであらう。

これ以外にも『平家物語』には戦場を舞台とするためか父子話が数多い。同巻「濱戦」では、我が命惜しさに子を見捨て生きながらえてしまった新中納言知盛の切々たる悔恨の口説き。巻八「妹尾最後」では、勇猛な武者でありながらも我子故に死を決意、凄惨な最期を遂げる妹尾兼康等、実に人間味のある父子が描かれている。

教材として『平家物語』を扱うようになってから、十三年経つた。最初は選択授業で古来有名な章段を抄出した既製のテキストを用いて、当時の歴史状況、武装の説明、簡単な文法的な解釈をして読み進めていった。所謂平均的な授業である。しかし、取り組んで行くうちに次第にそれだけでは満足できなくなつてきた。

殊に合戦譚を教材として扱つた場合、武勇・功名といった英雄的行為への単純な賞賛の物語は稀で、その背後には戦場で果てていった人々の悲劇の諸相が横溢していることに気づき始めたのである。戦闘という血で血を洗う修羅闘争の世界でありながら、そこ

に生きる人々の姿、行為は無残でありながらも生命に対する無上の哀惜を持っている。そこにこの作品の感動の所在がある。

近年、こうした『平家物語』への関心から、国語教育の大きな課題「文学教育」という言葉を再考している。こうした文学教材を通してどのように生徒の「人格」に関与してゆけるかということである。こうした方向は「道徳」という教育のタブーと接触せねばならないであろうが、言語教育のレベルを越えた古典教育を目指し、そこから大きく豊かなものを得ることを望みたいのである。今回の父子話への関心もそうした「文学教育」へのアプローチの一端である。

後考を期したい。

(都立富士高校定時制)

## 専門高校の現場から

西村 健

首都圏の普通高校に勤めていた私は、田舎の専門高校というものに、特別なイメージを抱いていた。腕白坊主が多くて活気にあふれていると思っていたのだ。でも、その予想は見事にくつがえされた。

燕工業高校の生徒は実におとなしい。授業態度を注意すれば、素直に従う。(尤もその五分後には元に戻ってしまうのだが……)。また、板書写しの熱心さは驚くべきだ。意味調べなどの

作業的な活動も、とても真面目に取り組んでくれる。

その反面、無気力なところも見受けられる。授業に対する積極性という点では、大いに不満が残る。発問しても、じつくり考える生徒はほんの一握りだ。多くは考えることにすぐ飽きて、教室がざわつき出すのである。そんな時は、つい結論を急いでしまい、もつと一緒に考えながら答を出したかったのにと悔いが残る。

私は今の学校に来て、改めて自分の力不足を感じた。普通高校で経験を重ね、それなりに自信の持てる実践方法も掴んだつもりだった。だが、そんな過去の遺産に胡坐をかいているわけにはいかない。また一から授業を作り直さねばならなかった。

そこで、まず彼らが学び易いやり方を探ることが大切だと考え、原点に戻って、生徒と向き合うことから始めることにした。彼らの弱点をうまくフォローしながらよい面を伸ばす方法はないか、と色々知恵をしばってみた。試行錯誤を繰り返したが、うまく授業をやれている手応えはなかなか掴めなかった。

そんなある日、教室を出た私を一人の生徒が追いかけてきた。何の用かと思ったら、授業でやっている「山月記」の感想を語り出したのだ。教室で文学談義をするのは、他の生徒の手前恥かしかったらしい。廊下での立ち話は次の授業チャイムまで続いた。

「教材選択を失敗したかなあ。」と思っていたところだけに、嬉しかった。感想文からも、予想以上に多くの生徒が楽しんで読んでいたことがわかった。

「うちの生徒には難しい。」などと最初から考えるのは、教師の

怠慢だと教えられた気がする。勉強嫌いな生徒が多い分、工夫のし甲斐もある。そんなところが専門高校の魅力なのかも知れない。  
(新潟県立燕工業高校)

## ほんだな

今年度は、太田正夫氏より御著書を寄贈していただきました。学会として心より御礼申し上げます。思います。

### 『十人十色を生かす文学教育』

——『ひかり、こけ』授業を中心に——

太田正夫著

はじめに——「いじめ」に対して、自己表現の対話化を

I 方法が思想——作品と自己と現実を糾す読み

II 多義性と自己表現——併行授業としての教室における「する」

読み

III 「十人十色を生かす」ことの、まとめとして

IV 「十人十色を生かす」授業の実例

あとがき

(一九九六年七月 三省堂 二千円)